

第Ⅱ部 里山学・地域共生学オープン・リサーチ・センター

(里山ORC) 設立経緯と諸事務記録

第1章 センター設置の目的と意義

—里山ORC構想調書(抜粋)—

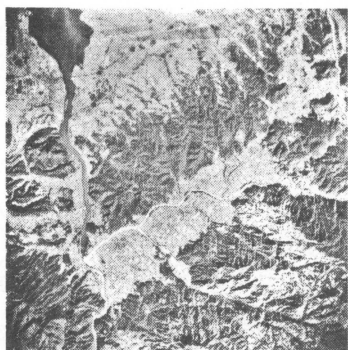
第1節 里山学・地域共生学オープン・リサーチ・センター(里山ORC) の特色と目的

龍谷大学は「共生を目指すグローバル大学」を基本理念のひとつとしている。人間同士の平和な共存のみならず、生きとし生けるものとの共生をもとめることは、仏教思想の根本でもある。里山こそは、人間が自然と多様な形で関わり、自然と共生することによって、人間同士の共存を可能にしてきた場所だった。龍谷大学は瀬田学舎(滋賀県大津市)に隣接する山林約38ヘクタールを有しており、それが典型的な里山林である。本研究組織は、龍谷大学エクステンションセンターにおける自然観察教室での実践および瀬田丘陵において里山保全活動を数年実践してきた保全研究グループの経験を生かし、理工学部環境ソリューション工学科がそれと連携して実施、運営される。平成14年制定の『新・生物多様性国家戦略』も「里地・里山」の保全を重要課題の一つとして提起しているように、里山は日本の自然において豊富な生物多様性を維持してきた仕掛けでもある。本研究組織は、瀬田丘陵(龍谷大学瀬田学舎および隣接里山林を含む丘陵)を中心フィールドとして里山の学術総合調査研究を行い、滋賀県琵琶湖周辺に点在する里山をも比較しつつ調査研究する。社会科学・人文科学の研究者も参加する、わが国でほとんど初めての里山総合学術調査研究を展開するのである。また、すでに形成されている地元住民および行政とのパートナーシップをさらに育成・拡大しつつ、里山保全のモデルを構築するとともに、里山の現代的活用についての情報発信源として、全国の環境NGO・NPOおよび里山保全市民団体(全国に約800団体ある)とのネットワークを構

築する。さらに、同様にすでに里山保全の研究・実践に着手している金沢大学、九州大学、京都女子大学から研究者の参加を得て、自然科学の研究者たちを社会科学・人文科学の研究者たちと連携させることによって、世界に発信しうる、日本の里山研究の一大拠点をなすことを目的とする。

第2節 研究プロジェクトの目的と意義

「里山」は狭義には農用林としての二次林であり、広義には里山林・田圃・ため池・用水路・畦などがセットになった農業環境・農業景観であるが、いずれにせよ人間が長期にわたって手を入れ、利用してきた二次的自然である。里山林は、エネルギー革命と農業革命によって放置され、都市の膨張とともに開発のターゲットにされてきた。しかし滋賀県下には、放置されて「死につつある里山」となお活用されて「生きている里山」とが広く分布している。本研究プロジェクトは、瀬田丘陵および滋賀県下の里山を総合的に調査研究するとともに、里山を持続させてきた伝統的な農林業技術を調査研究する。この場合の「技術」は「技法」と「作法」との両方の意味を含む。人間との多様な関係性の総体としての里山は、「文化としての自然」として把握されるべきものであり、社会科学・人文科学からの研究を是非とも必要としている自然である。さらに、里山をめぐる地域共同体のありようを歴史的に研究することを通して、また現代における社会参加・市民参加の可能性を追求することを通して、里山保全活動を軸とした地域共生のモデルを構築する。(下の2枚の航空写真は、瀬田丘陵地帯の歴史的推移を示したものである。)



米軍撮影の空中写真（1947年撮影）
（口絵カラー写真参照）

国土地理院撮影の空中写真（2000年撮影）

上述の諸目的を達成するために、本研究は以下の二つの研究チームを組織する。

（１）生物多様性・環境計測調査研究（研究班１）

本研究班は、生物多様性に焦点をあてて調査研究を行う。各種気象要素および地域生態系のエネルギー循環の調査研究も重要な課題となる。瀬田丘陵の保全研究グループは、既に山林内外の定点的温度測定記録をとり、熱エネルギーの計算を実験的に試みてきた。また、植物相の調査に関しては一定程度の成果をあげており、植物約250種、菌類約120種を確認している。本研究班においては、熱エネルギー計算を中心に環境計測・気象観測の精度を高めるとともに、植物相のみならず、昆虫・動物の生態についても調査する。さらに水辺環境を創生し、かつての里山利用の形態を復元し、生物相の復元過程を追跡調査する。また、本研究班は、保全生態学の立場から、伝統的な里山管理技術の調査研究に関して指導性を発揮するとともに、木質バイオマス利用の実験的研究をも行う。

（２）社会人文科学・地域共生学調査研究（研究班２）

一般に環境についての研究は、従来までの学問の専門分化を改める必要に迫られる。本研究班も旧来の社会科学・人文科学の区別を可能な限り統合することを意図する。そしてその意図は、ここでは、地域共生の探求という共通の目的によって支えられている。社会人文科学・地域共生学と命名するのは、こうした理由による。

瀬田丘陵は江戸時代、膳所藩の所領であったが、当時の入会慣行についてはまったく判明していないし、明治以後の土地所有の移動についても、十分判然としない部分を含んでいる。瀬田丘陵のみならず、滋賀県下の里山地帯での入会権の歴史と、農業経営との関係について法制史学的に調査研究するとともに、近世史・地域史の立場から歴史学的に調査研究する。また、戦後日本の農業政策・森林政策および農業経済・森林経営の歴史的研究を踏まえて、とくに近畿圏と滋賀県に焦点をあて、この面での社会科学的調査と研究を行う。さらに、龍谷大学文学部史学教室では、瀬田丘陵において縄文式土器の焼成実験を実施してきた。こうした実験考古学的な研究も視野にいれる。また、近世史および環境社会学の立場から、里山の伝統的な利用および現代における新たな里山活用の可能性について追究する。例えばエコツーリズムは、諸外国では経済効率の観点からも環境保護の有力な手法として評価されているケースが多々あり、里山モデルへの適用可能性を調査研究する。さらに、「文化としての自然」の持続性を可能にしてきた背景には、伝統的な宗教儀礼を中心とした種々の習俗・慣習があるが、そうした習俗・慣習の調査研究を行う。また、自然の概念、環境の概念をめぐって、仏教学、哲学の視点から研究し、「里山」概念の彫琢をするとともに、環境倫理の「里山モデル」の構築を、欧米の環境倫理との比較を通して追求する。

第3節 研究成果の公開と研究班の連携

瀬田丘陵の保全研究グループは、過去3年、4回にわたって龍谷大学「里山シンポジウム」を開催した実績を有し、それによって、類似の里山

保全活動を展開している九州大学、金沢大学、京都女子大学等との連携関係を築いてきた。本研究においては、こうした連携を深め、共同調査を実施し、調査研究の成果の共有をはかる。また、龍谷大学における里山学・地域共生学の構築は、地元住民および行政とのパートナーシップを育成するとともに、大学を発信源とする里山保全のネットワーク作りに寄与することを意図している。こうしたことのために、研究成果を以下のような仕方で公開する。

- 1) 年次研究報告書を出版し、学術誌に研究論文を公刊し、さらに研究叢書を出版する。
- 2) 大学コンソーシアム京都（京都地域の加盟大学の協力によって単位互換認定を行い、社会人教育も行っている高等教育システム）に科目を開設する。
- 3) 公開講座を開設する。これは教室での講義のみではなく、里山保全の実習を含む。また、地元住民との保全の協働活動を含む。さらに、公開講座は、地元学校に対しても行う。
- 4) ホームページを開設して、研究成果をタイムリーに発信する。
- 5) 国内シンポジウム・国際シンポジウムを開催する。
- 6) 龍谷大学理工学部環境ソリューション工学科の大学院新設（平成19年度予定）に伴い大学院科目を開設して、研究成果を大学院教育に生かしていく。

なお、上記2つの研究班は、年次研究報告書を合同で作成し、公開講座、国内・国際シンポジウムを共同で開催するが、その準備のために、合同の研究会を定期的に開催する。とりわけ、初年度には、「里山」概念と瀬田丘陵での保全活動計画に関して、共通の理解と課題を明確化するよう、合同の研究会を重視する。また、センター長と各研究班の研究代表者は、研究事務局会議を定期的に開催する。各研究班代表者は、それぞれの研究の進捗状況、直面している問題等について十分に連絡しあう。さらに、センター長とは別に事務局長を置き、2つの研究班の相互連携に努める。